群教セ	E03 － 03
	令3.278集
	保体－中

運動課題の合理的な解決に向けて、主体的に取り組み方を工夫することができる生徒の育成

――学習活動に対する目的意識のもたせ方の工夫を通して――

特別研修員　黒岩　慎也

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

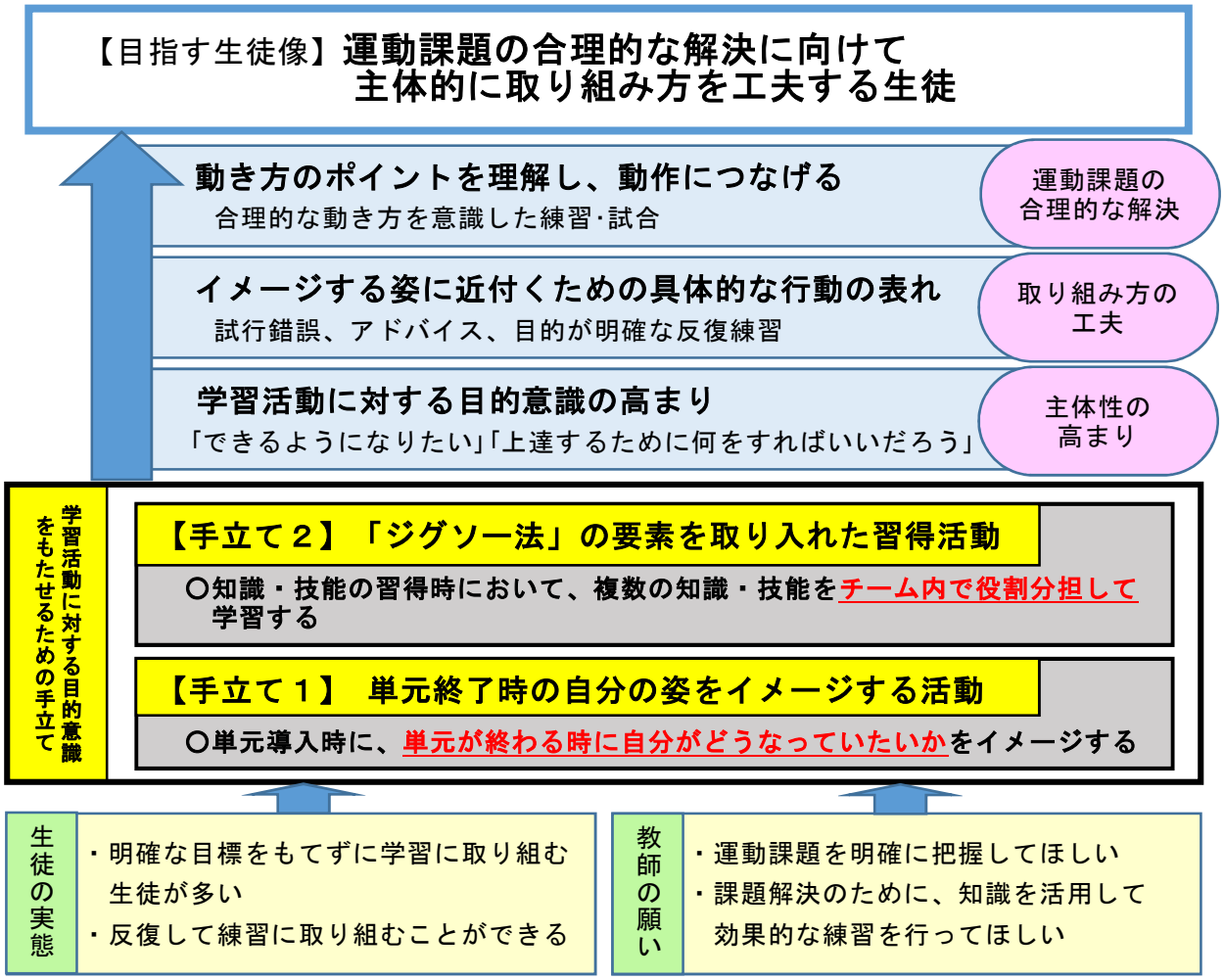
中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説保健体育編には、「知識」の指導に際して「動きの獲得を通して一層知識の大切さを実感できるようにすることや、知識を活用し課題を発見・解決するなどの『思考力、判断力、表現力等』を育む学習につながるよう、汎用性のある知識を精選した上で、知識を基盤とした学習の充実を図ることが大切である」とある。

研究協力校では、運動課題に対して、できなければ何とかしてできるよう何度も反復して取り組むなどの努力をする生徒が多く見られる。できないことをできるようにするために反復練習はもちろん大事だが、知識を活用し、的確に課題を把握して合理的な課題解決の方法を工夫することで、より効果的に技能の習得ができるであろうと考える。

そこで、生徒が運動課題に主体的に取り組み、課題解決の方法を工夫する必要性を感じられるような働き掛けを重視していくこととし、上記テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

学習活動に対する生徒の目的意識をもたせるためには、生徒に学習活動の必要性を感じさせることが有効であろうと考え、次の二つの活動を研究テーマに迫る手立てとして授業に取り入れた。

手立て１　単元終了時の自分の姿をイメージする活動
手立て２　「ジグソー法」の要素を取り入れた習得活動

手立て１は、学習の目標や見通しをもちやすくするために、単元導入時に行う活動である。既習事項や身に付けたい技能、種目の特性、現在の自分の様子を踏まえ、単元終了時にどのように運動を行えるようになっていたいかを考え、具体的な姿をイメージして学習カードに記入させる。ゴールの姿をイメージすることで、そこに近付くためにしなければならないことを考え、実際にそれを行う必要性を感じることができるようにした。活動の際には現状を把握しやすくするために、既習の技能を確認する場面を動画撮影し、個々のICT端末で視聴させることで、運動課題を客観的に把握できるようにした。

手立て２は、新たな知識・技能や、既習の技能をよりよく行う方法を習得する場面でジグソー法の要素を取り入れた活動である。チーム内で役割分担して別々の知識・技能を習得し（エキスパート活動）、習得した内容をチームメイトに伝えることで（ジグソー活動）、一人一人が責任感をもち、学習活動の必要性を感じることができるようにした。ICT端末を活用し、エキスパート活動で学習した内容をプレゼンテーションソフトにまとめることで、学習内容の理解を深めるとともに、ジグソー活動の際の補助資料としてチームメイトへ伝わりやすくなるようにした。

このように、生徒の学習活動に対する必要感をもたせることで、主体的な学習活動への取り組みにつながり、技能の習得に向け、必要な知識を求めたり、得た知識を活用して効果的な練習方法を考えたりすることができるようになるであろうと考える。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　「単元の始めにゴールの姿をイメージしたことはどんな影響がありましたか」という質問に対して、「自分がやるべきことがはっきりしたから、どんな練習をすればよいか考えて取り組めた」という回答が見られた。ゴールの姿をイメージすることで、その姿に近付くためにはどのような技能を身に付ける必要があるか、その技能を身に付けるためのポイントは何か、という思考につながり、学習の必要感を高めるとともに単元の見通しを明確にもつことにつながった。

○　ジグソー法の要素を取り入れることで、「チームメイトに伝えるため」に自分の役割を果たす責任が生まれ、より真剣に学習に取り組む姿が見られた。また、得た知識をアウトプットする活動を通して、学習したことの理解を深め、動きの変化につなげることができていた。

○　自分が目標とする姿に近付くために、「技能を身に付けたい」「できるようになりたい」という思いが学習への取り組み方の変化として表れていた。単調な動きの繰り返しではなく、習得した知識を活用し、失敗したら何が悪かったかを考え、動きのポイントを助言し合う姿が見られた。

２　課題

○　経験のある種目についてはその種目の楽しさや動きのイメージがもちやすく、単元終了時の姿もイメージしやすくなるが、経験がない種目についてはイメージすることが難しくなることが考えらえる。見本となる動画の提示や試しのゲームなど、イメージをもちやすくするための工夫が必要である。

○　ジグソー法は、個々の生徒の表現力によってチーム間に伝達内容の差が生じる可能性がある。エキスパート活動中に得た知識について、グループ内で内容を確認し合い、共通の提示資料を作成するなどの時間を確保する必要があると考える。

実践例

１　単元名　　「球技・ネット型（バレーボール）」（第３学年・２学期）

２　本単元について

バレーボールは、二つのチームがコート上でネットを挟んで相対し、ボールを打ち合って得点を競う、ネット型には数少ないチーム競技である。ラリー中にボールを持ったり落としたりすると反則になり、攻守の切り替えも早いことから難しさも感じるが、それがこの競技の特性であり楽しさでもある。ボールを「つなぐ」ことがバレーボールの特徴であり、そのためにチームでカバーし合ったり、声を掛け合ったりすることが必要となる。これらのことが、自らの責任を果たし、互いに助け合い、ルールやマナーを守るといった態度の育成につながっていくと考える。

本単元では三段攻撃を中心に学習する。安定して三段攻撃ができるよう、各ポジションの役割を意識してプレイし、集団的な技能が更に高められるようにしていく。試合に向けて練習する過程で、技能を習得するためのポイントや課題を明確にし、これを解決するための方法を考えていくことで、練習の方法や作戦を工夫する力を育てられると考える。また、集団的な技能を行うためにチームで協力しながら個人技能を高め、その学習活動を通してチーム全員で協力する楽しさを味わい、運動への関心を高め、主体的に運動に親しむ態度を身に付けることができると考える。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	バレーボールの学習を通して次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア　勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解するとともに、役割に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防をすることができるようにする。（知識及び技能） イ　攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。　（思考力、判断力、表現力等） ウ　球技に自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとすること、作戦などについての話合いに貢献しようとすること、一人一人の違いに応じたプレイなどを大切にしようとすること、互いに助け合い教え合おうとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。（学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1) 技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解するとともに、役割に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防をすることができる。（知識・技能） (2) 攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。（思考・判断・表現） (3) 課題を解決するための活動に繰り返し粘り強く取り組むとともに、仲間を励ましたり仲間や相手のよいプレイを称賛したりすること、チーム全員が楽しむことができるよう配慮すること、作戦などについての話合いに貢献しようとすること、互いに助け合い教え合おうとすることなどや、活動場所の安全を確保することをしている。（主体的に学習に取り組む態度）

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１ ～２時	・ゲームを通して既習事項を確認し、自己やチームの課題を明らかにする。 ・単元終了時の自身やチームの姿をイメージする活動を通して学習の見通しをもち、意欲的に取り組めるようにする。
追究する	第３時	・ポジション別のエキスパート活動を通して、パスやスパイクを正確に行うためのポイントを理解する。
	第４ ～５時	・ジグソー活動を通して技能のポイントを仲間と共有し、パスやスパイクを正確に行えるようにする。
	第６ ～７時	・ジグソー学習を通して、フォーメーションやポジション編成を理解する。
	第８ ～10時	・ゲームの様子を撮影してチームの課題を把握し、解決方法を工夫する活動を通して、連携プレイができるようにする。
まとめる	第11 ～12時	・正規のルールに近い試合を行い、学習の成果を発揮する。

３　具体化した手立てについて

本単元は全 12 時間で計画した。つかむ過程にあたる第１・２時の授業で単元の明確な目標がもてるよう、手立て１を行った。また、追究する過程のうち、第３～７時を既習の動きをより高めるとともに、新たな知識や技能を習得することをねらいとし、手立て２を行った。

手立て１　単元終了時の自分の姿をイメージする活動

・本単元で身に付けたい技能を確認する。
・試しのゲームを行い、その様子を動画撮影し、自分自身の動きを客観的に把握する。
・１、２年時の学習を思い出し、バレーボールの楽しさについて考える。
・上記３点を踏まえ、本単元終了時にどのようなゲーム、どのようなプレイができていれば「楽しい」と感じられるか、具体的な姿をイメージして考える。

手立て２　ジグソー法の要素を取り入れた習得活動

・習得する知識や技能をチーム内で役割分担し、同じ内容同士でグループとなってその知識・技能について学習し、学習した内容をチームに持ち帰り、チームメイトに伝える。

４　授業の実際

単元導入のつかむ過程で２時間を配当した。単元の導入にあたり、単元のゴールの姿をイメージすることで目標を明確化し、学習活動に意欲的に取り組むことができるようになることをねらいとした。

続く第３～10 時を追究する過程に配当し、そのうち第３～５時をアンダーハンドパス、オーバーハンドパス、スパイクといった個人技能についての学習、第６・７時をチームのフォーメーションについての学習として配当し、ジグソー法の要素を取り入れた学習活動を展開した。

(1)　手立て１　単元終了時の自分の姿をイメージする活動

単元の導入に当たり、単元終了時の自分の姿をイメージさせた。イメージ化に当たっては、まず本単元で身に付けたい事項及び既習事項、現在の自分自身の状況を確認した。試しのゲームを通して既習事項を確認するとともに、ゲームの様子を動画撮影して視聴することで視覚的に自分の様子を確認できるようにした。また、１、２年時の学習を思い出させ、バレーボールで何が楽しかったかを考えた。以上の活動を踏まえ、中学校の仕上げである３年生のバレーボールの授業が終わる時、自分やチームがどのようなプレイやゲームができれば楽しいか、具体的な姿をイメージさせる活動を行った。考える活動に際してはデジタル学習カードに入力させた。

「三段攻撃ができるようになっていたい」等、具体的な技能の名称を挙げている様子が見られ、そのために正確なパスができる必要がある等、学習内容の必要性を感じる記述も見られた。（図１）

名前	今の自分(たち)のプレイを分析 前回の動画を見て感じたこと ①チーム ②自分	バレーボールは、どんな試合、どんなプレイができると「楽しい」ですか？ ①チームとして ②個人として	単元の終わりには、どうなっていたいですか？（こんなことができるようになって、こんな試合をして、こんなふうにバレーボールを楽しんでいる。）
	①各自、近くのボールをしっかり取れているが、安定感がない ②焦っていて正確なパスができていない	①攻撃をして得点したとき ①連携プレーがうまくできたとき ②自分のおもった所にボールが飛んだとき	思った所にボールを飛ばせるようになっている 声掛けをしっかりできている チームに貢献している
	①自分にボールが来なくてもバタバタしている。 ②へっぴり腰になっている。棒立ち。ボールの落下地点には入れている。味方へのカバーが遅い	①連携したプレーでラリーが続き自分たちが点を取ったとき。 ②いいレシーブなどができたとき。味方との連携ができたとき。 「うまいね」などと褒めてもらえたとき。	正確にパスができていて、いいスパイクが打てるようになっている。自分だけでなくチームのことも考えながらプレーしていてチームに貢献できる。
	①ボールの安定感がない ②落下点に入れてない、腕を振ってる、ジャッジが下手	①レシーブオーバースパイクフェイントと、攻撃に繋げられること、一緒に喜ぶこと、パスが上手く行ったとき ②サーブが決まったとき、攻撃がうまく行ったとき、チームに褒められたとき	腕を振らず、落下点に入り、正確なパスや攻撃、サーブが打てるようになっている。 返事や名前などの声や、改善点を言い合えるチームになっている
	①ラリーがあまり続いていない。 ②フラフラしていた。ボールを積極的に捕りに行けていた。	①ラリーが続いてボールが上手く相手のコートに返ったとき。 ②パスを上手く繋げたとき。攻撃を打てたとき。	正確なパスができていて、攻撃を打てるようになっている。カバーができる。チームに貢献できるようなプレイをしている。
	①声掛けが少なくお見合いが多い、落下地点に入れていない ②ボールを打たないときに構えられていない、ボールが低い	①三段攻撃が決まったとき、声掛けをしてうまくパスがまわったとき ②自分の打ったボールが決まったとき、ボールをうまく繋げられてチームに貢献できたとき	正確なレシーブやサーブなどの基本技能をしっかり身につけ、青チームの一員として声をかけたり仲間と協力し、貢献してバレーボールを楽しんでいる。
	①　ボールが続かない。　間に落とすことが多い ②　手を振っている。ボールの落下地点に入っていない	①　チームで協力して、点を取ったとき　ボールを繋げて攻撃ができたとき ②　攻撃が決まったとき　ボールを繋ぐことが出来たとき	声を出して間にボールを落とさないようになっていたい。 相手が取りやすいパスをして三段攻撃ができるようになっていたい。

図１　単元終了時の自分の姿をイメージする活動での生徒の考え

⑵　手立て２　ジグソー法の要素を取り入れた習得活動

ボールを正確に操作するための個人技能と、チームで連携した動きをするためのポジショニングについて学習する二つの場面でジグソー法の要素を取り入れた活動を行った。

ボール操作の学習では、三段攻撃を成立させるために必要な「アンダーハンドパス」、「オーバーハンドパス」、「スパイク」の３技能をチーム内で分担し、各チームから同じ技能について学習する者同士でグループとなり、技能を正確に行うためのポイントについて確認した。各グループにバレーボール部員を配置し、バレーボール部員の見本の動作を見て体の使い方を観察したり、アドバイスをもらったりして技能のポイントについて理解した（図２）。グループで学習した技能ポイントについてはICT端末のプレゼンテーションソフトにまとめ、学習内容を記録するとともに、チームメイトに伝える際の補助資料として提示できるようにした（図３）。

技能グループごとに学習した内容をチームにもち帰り、チームメイトに内容を伝え、練習する活動を通して、全ての技能のポイントについて全てのチームメイトが理解できるようにした。

「チームメイトに伝える」「チームではこの技能のポイントについて自分しか知らない」ということが生徒の責任感を高め、より真剣に学習活動に取り組むことにつながった。

図２　技能のポイントを確認する様子

落下地点に回り込み正面でボールを上げる
体全体で上げるイメージ
腕を面としてボールを飛ばしたい方向へ面を向ける

図３　技能ポイントのまとめ

５　考察

単元の導入時に単元のゴールの姿をイメージする活動を行ったことで、生徒がより具体的な単元の目標をもつことにつながり、目標が具体化したことで身に付けなければならない技能がはっきりとし、授業で何をすればよいか生徒自身が考え、学習活動に主体的に取り組むことにつながったと考える。

技能を正確に行うためのポイントを習得する活動にジグソー法の要素を取り入れたことで、一人一人の役割が明確になり、意欲的な学習活動への取組につながったと考えられる。学習内容についても、単元のゴールでイメージする姿に近付くために必要感を感じており、取組に対する姿勢に効果的であった。

手立て１、２とも、学習活動に対する目的意識をもたせることに有効に作用したと考える。目的意識の高まりから、学習する内容を確実に身に付けたいという意欲につながり、確実に身に付けるためにグループの仲間と意見交流しながら試行錯誤し、繰り返し取り組む姿が見られた。

手立て１については、「ゴールの姿に近付くために、この時間ではこれができるようになる」といった１時間ごとの導入につなげていけると、より効果が上がるのではないかと考える。